

みんなの大学校 2020 年度基礎課程修了論文

社会との接点へ向けて  
—障がい者からの発信—

みんなの大学校教養学部社会教養学科  
水越真哉

2021 年 1 月 31 日

# 目次

第1章 模索の始まり .....	1
第1節 自画像を描いて.....	1
第2節 私 .....	3
第2章 障がいの定義を考える .....	7
第1節 分類と変遷 .....	7
第2節 「ひきこもり」から「障がい者」へ .....	9
第3章 展望 .....	13
第1節 公共哲学の視点から .....	13
第2節 シャローム大学校へ .....	14
第4章 自己実現への道.....	17
第1節 自分にとって学ぶとは .....	17
第2節 どの時点からでも始められる社会 .....	18
第5章 まとめ 望む理解とその形 .....	22

## 第1章 模索の始まり

### 第1節 自画像を描いて

2019年4月学校に入り、前期、芸術の講義の提出課題として早い段階、6月からとりかかり始めたのは、自己表現としての自画像だった。課題としては、表現の方法は何でもよく、絵でも、粘土でも、2次元、3次元問わず、焼き物でさえも選択肢してよいとのことだった。それを選ぶに先立ち、美術館を2度鑑賞に行っていた。1回目5月、東京ステーションギャラリーでのルート・ブリュックの個展、2回目6月に国立西洋美術館の松方コレクション展であった。

ルート・ブリュック(1916-1999)は、焼物を様々な手法で使い、伝統的な作品から、抽象的な物、幾何学的な立体物まで、生涯の時期により作風が変わって行った芸術家であった。それらは美しく、しかし私にはどこか悲しさのようなものを感じる作品がいくつかあった。松方コレクション展では、その中に私の一番好きなヨハネス・フェルメール(1632-1675)の作品は無かったものの、同じく好きなクロード・モネ(1840-1926)やフィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)など鑑賞することができた。モネの「睡蓮」は近くで観ると大胆なタッチであり、離れたところから眺めると繊細な表現が見て取れるという本物でしか味わえない感想を持った。ゴッホの「アルルの寝室」はゆがみのある構図に何かどんと引き込まれる力を受けた。それまで、本やメディアでしか見ることのできなかつたものを、間近で鑑賞した感動もあったが現実感とでもいうのだろうか、今までのわたしに足りないものをまさに感じ取ることができた。そして、課題を自画像として選ぶことになるのだが、学校に入りある意味で人生をもう一度歩み始める決意と迷い、その中間にいる現在の自分を残したいと思ったのである。

その自画像を、絵画の中でも残したいとの思いと、初めての挑戦という意味で油絵を選ぶことになる。初めてのことに對して怖がりな私は、はじめ水彩かアクリルを考えていた。しかし、指導の講師より「油絵を描く機会なんてひょっとしたら人生でもうないかも知れないですよ」との言葉に動かされ、最初こそ戸惑ったもののいつしか真逆の描きたいとの強い思いに変わっていた。

講師に、油絵の基本的な事柄がら、道具や絵の具の性質などについて教えいただき、並行して参考となる作家、絵画を捜すよう勧められる。そしてインターネット上でギュスターヴ・カイユボットの自画像と出会う。ギュスターヴ・カイユボット(1848-1894)はパリの upper class の生まれで大学で法律を学んだが画家となった。自身の資産により交流を持つ印象派の画家に対して金銭や絵画の購入を通して援助を行っていた。ほかの印象派の画家より写実主義的傾向が強く、パリの upper class の慎ましい生活を描いている。晩年は、絵の発表はやめ、庭園作りとヨットに集中し友人との付き合いを楽しんだ。その自画像の作品は、確固とした強さが感じられ、自分がなっていきたい理想に近い落ち着きと、柔らかさも同居するものだった。その時点の自分が目指し変われたらとの目標としても惚れ込んでしまっ

た。絵と同じポーズをして自分で自分の写真を撮ってみる。なかなか上手くいかない。どうにか一枚、斜に構え顔もその方向に、しかし、目はしっかりと作品を見る人を見つめるようにと、参考にするにはまずまずのものが撮れた。

まずは、長らく開くことのなかったスケッチブックを手に取り向き合う。私はかなり昔に独学でデッサンの練習をしたことがある。とは言っても、直方体を数個使った静物面のデッサンや、本の絵画や雑誌の人物をただ横に置いて描いてみる程度であった。それでも感触を思い出しつつ、一枚目。歪んでしまった。二枚目、やはり比率は少々いびつでも、次は本番にくらいのが描けた。いよいよキャンパスに下書きをする。緊張は深まり、慎重になる。頭部の輪郭をラフに丸く鉛筆で線を引こうとするが、初めてのキャンパスの目地がガリガリと描きづらい。慎重さが増し線は薄い。これではすぐに見えなくなってしまうと線に線を重ねていく。だんだんと鉛筆の先も丸さが適度になり筆圧も上がっていった。輪郭の次は鼻筋を数回のタッチに分けて一本通す。それに合わせいよいよ目にとりかかる。細かな表情は気にせずとにかく位置だけは気にして描く。首肩も簡単にそして服を着せて、本当にラフに描き切る。

そして今度も、初めての素材、油絵具。紙製のパレットにのせた時からもう新鮮な感覚。白と黒を多めに何色か。いよいよ、筆につけるがやはり初めての感覚、感触が重い。選んだのは背景となる黒。背景をベタ塗りすることによって筆と絵の具に慣れるためである。溶き油で薄めて、おそらくちょうどよい粘度で今度こそキャンパスにのせる。紙とは違いノリが悪く伸びもしないため、かすれてしまった。しかし、そんなことに集中しているうちに、怖さはなくなり練習と思ってどんどん背景をベタ塗りし終わる。

つぎは自画像を描くには避けて通れない最も大切な顔にとりかかる。不安な中にも前を見据えた、未来に一步を踏み出そうというこの時の自分を表したい。しかし、知識も技術もない、どこから始めればいいのか。まずは全体をぼんやりと肌を塗ることにする。肌の色を作るのはとても難しく、今回も講師のアドバイスを頻繁に受ける。明暗3段階わたしが思っている以上にコントラストをつけて色を作ることを教えてもらう。背景で慣れた筆がまた慎重になる。表情にあまり関係のないオデコを、作った色に白を混ぜ薄く塗り始める。ほんの少し、色を濃くして鼻筋、目をやはりぼんやりと描く。この頃には油絵は上から描き直すことができるからと、教えられた色で全体を徐々に浮かび上がらせるように太い筆、細い筆を使い分けどんどんと塗り重ねていく。怖さは消え、もう楽しささえ感じて。陰影のつけ方は自分でもハッキリと間違っているとわかりつつ筆のままに絵の具をのせていく。

その勢いで、私のお気に入りの紺のジャケットに取り掛かり手早く仕上げていく。ここまで、塗っては乾かし3日ほどを空けの8回くらいだったろうか。期間にしてもうひと月は経っていた。カイユボットの自画像をまねて、背景にかげろうのような光を表す薄黄色を塗ることにする。黒で表したかった不安だけでなく、未来への一步を表す光として。顔にも何度も手を加え、仕上がりが刻々と近づく。ハイライトを入れ、瞳を慎重に手直しし完成した。

まずまずと、一呼吸置いた。大きな絵を描いたのは初めてである。だが、あることに気が

つく。一度もキャンパスから距離を取って絵のデッサンなどの狂いを確かめていなかったのである。恐る恐る後ろに歩いてみる。案の定、近くで見えていた時と印象が違う。明らかにデッサンがくるっている。顔が何か間延びした印象で、眼にも力がない。手遅れであった。近づいて手を入れ直そうかと考える。近くで観る絵は私の技術、感性をすべて出し切ったものであった。しばらくの間、筆を洗いながら迷い悩む。気を落としつつもところを固め、仕上がったことを示すサインを記す。

また離れてみる。また今度も印象が違う。絵に何か自分を感じた。上手くもない、はっきりと似ている訳でもない。キャンパスが大きいというだけでなく、時間も一ヶ月半以上も向き合ったのである。自分の作品ではあるが何か訴え掛けるものを吹き込んでいたのだと思えるようになっていた。初めてがそんなに上手いはずがないのである。デッサンの狂いも、陰影のいいかげんさも、はっきりとしない表情も、すべてトータルで見るとなかなか思い通り、描きたかったその時の自分がまさに居たのである。技術の無さが「不安」「葛藤」、そして「迷い」をくしくも出すことができていた。

さらには背景の黄色のぼんやりとした光や、うつろながらもはっきりと正面を見据えた目などから、観る人に何かを感じ取ってもらえるのではないかと思えるまでになっていた。「『迷い』から」と題した。不安からの未来への一步。学校に入り様々な思いを抱えているその時の自分。既に、その一步を踏み出し始めている自分に気づくことができた。そんなひと時を切り取ることができたものを残すことが出来、嬉しく思っている。迷いから、ここから。

## 第2節 私

私は、1975年に埼玉県に生まれる。父は、商店街のアーケード製作会社の工場で板金工をしていた。母は専業主婦だった。2歳下に弟が生まれ4人家族として暮らす。父の工場は埼玉県の川越狭山工業団地にあり、そこから車で5分くらいのところで駅から近い場所にある平屋の社宅に住んでいた。その周りの住宅地はほとんどが2階建ての住宅で、6軒だけ社宅の平屋だった。わたしの幼少期はこの6軒のコミュニティーが生活のほぼすべてであった。特にその6軒の外に壁を感じていたわけではないが、その中で事足りていたのであった。

3軒3軒並びその間の道が遊び場であった。もちろん買い物には駅の近くまで、親について、6軒の空間から出る。だが幼少期のはじめはこのコミュニティーに帰ってくるとホッとしていたように思う。新興住宅地であるが、その6軒は社宅で人もお互いに親密で、町でもあり、田舎でもある、私にとっての原風景である。

もう少し歳を重ね幼稚園に入るところには、私の世界はもう少し広がり周りの2階建ての家の子供たちとも遊ぶようになっていた。引け目は感じないものの、何か文化や物質的な、違いを感じ始めてはいた。遊んでいる間は感じないのだが、6軒の中に戻ると何やらホッとするのは相変わらず同じであった。幼稚園自体にもなじみ切れなかった。他の子供があまり

にも子供らしいのである。周りは楽しそうにしている。楽しそうにしていない、私の方が異質であると言わんばかりに。

時は進み小学生に入り低学年、私は更に周りとの違和感を持っていた。学校では、とにかく何事も無いように静かな子供として過ごし、家へ帰ると元気になるという生活だったように覚えている。しかし、1年生か2年生のある日、いつものように静かに一人過ごしていたか、ごく親しいクラスメイトといたのかは覚えていない。が、ある休み時間、珍しくこちらから言葉を発したのだろう。その時、関係のない、幼稚園も違う親しくもないクラスメイトから、「水越がしゃべった」と言われてしまう。確かに口数は少なかったが友人はいたので、そんなこと言われる筋合いはないと、無視をした。だが、そのような関心を持たないこと、からかいの対象になることに対しては相手にしてもしょうがないという態度を取っていたことにあらためて気がつく。しばらくして、その言葉は、わたしにショックを与えていた。人目を気にするようになっていったのである。

ものごころ付いた頃には、母親から友達がいない、外で遊ばないと、「子供らしく」といわれ、私の性格や興味に合わないものを押し付けられていた。けれども気にしてはいなかった。自分性格、傾向を把握していて、合わないものは合わないと言葉には出さないが、行動ははっきりしていた。それでも、「水越がしゃべった」は、私をだんだんとむしばんでいった。子供とはいえ社会を、世の中を気にするようにはなっていたので、普通とは何か、どう振る舞えば普通に見えるのかを常に気にするようになっていた。それは、何を演じればいいのかでもあった。

今度は救いが与えられる。小学校の中学年に任天堂のファミリーコンピュータを親に買ってもらう。周りから遅れること数年ではある。「与えられたもの」と「欲しかったもの」が本当に一致していた嬉しいプレゼントであった。このことは、思わぬ効用をもたらす。いままで、私も相手も、お互いに興味が持てず、交流があってもやはり違和感があった友人と、無理や普通を考えることなく付き合えるきっかけを得たのである。ゲームのカセットを持って遊びに行く、貸し借りをするなど、友人の数が増えた。ゲームがきっかけで親しくなったのであるが、もうそうなれば今までの無理がなくなり、サッカーや、ほかの遊び、他愛のない会話なども意識することなく楽しめるようになっていた。

4年生の時に同じ町内のさらに駅に近いマンションに引っ越す。その事により、生活環境を同じくする友人、つまり同じ建物にかぎらずマンションに住む友人やその近所に、一挙に友人の数がまた増えた。それまでの友人もほぼそのままだが、友人のコミュニティーが変わったのだと思う。コミュニティーの集まりとでもいうのか、もっと大きい規模の世界に入っていった。それまで何となく感じていた壁というのは、ほんとうに存在し、環境の影響と私の側にも原因があり、それが無くなったことが大きく作用していた。そこで、今までいかに狭い世界にいたかを思い知った。それは仕方のかかったことだとも思いつつ。もう、原風景の場所には一切近づかない自分もいた。

中学生になり、部活動はバスケットボール部へ入った。特にその1年生では、野球部やサ

サッカー部よりもグラウンドを走りこむと、後にだが有名だったことを知る。1年後の1500m走ではタイムが1分以上も縮まり、早い方の分類にまでなっていた。そのことは、それまで持っていた体力への劣等感が薄まることにつながる。勉強も、毎日行い、塾に行っていないにもかかわらず、自身としても、順位的にもどんと伸びていった。中学1年生の1年間は、朝早起きし、部活の朝練習、勉強、部活動、帰宅しての学習、と規則正しく乱すこともなく理想ともいえる時期であった。

だが2年生、もう歯車が狂いだす。いよいよ受験が頭にのぼってくるのである。高校受験、家庭の事情でいわゆる「押さえ」と言われる私立高校は、私は受けることすらできず、大学も行かせてもらえない。親に協力をしてもらうために、1年生の時ですら成績がよかったものを更に無理な限界のところまで勉強をして成績をあげなければならなかった。そして自分としては、成し遂げてしまった。心身の不安定という代償とともに。それでも、親の承諾は得られず3年生、周りも本気になりだし、逆にやる気をなくしかけていた私は、成績、身体、こころ、すべて崩れていってしまった。そして迷う、普通科の高校に行き就職するよりも、工業高校へ行き手に職をつけようかと。

結局、工業高校へと通い、心機一転、高校生活を楽しもうとバスケットボール、勉強と1学期は楽しんでいた。しかし、また勉強を楽しめば楽しむほど、大学へのあこがれは増していった。夏休み、本気で大学に行きたいのなら夏休みだけでもバイトをして稼いでみると言われる。今更と思いつつも、かすかな光を見だし「バイト」、「部活」、「勉強」と無理をした。それがとうとう2学期に入り、限界に達した。まず、体がだるく部活動を休ませてもらう。それでも回復せず、そのうち頭を傾けただけでめまいがするようになる。勉強はしっかりとしなければと気を張っていたが、担任の先生に保健室で休むようにと言われる。そこまで悪いとは気づかれていないつもりだった。同時にあらためて自分の状態を意識する。張りつめて保っていたものが途切れた。そして数日後、ついに朝、体が起き上がらないのである。学校を休む。はじめは、2、3日。それが1週間、2週間と伸びた。完全に休むようになり、3月ついには休学届を提出した。

身体、こころ、共にボロボロであった。それでも、悪あがきと思って本来なら3年生になる直前の3月、大学入学資格検定を受けるためには高校に在籍してはいけないうえ、退学届を提出する。そして勉強を始めた。5分勉強しては休む、の繰り返しであった。長くても1度には30分と連続では机に向かえないような状態だった。1日あたり合わせても3時間は絶対に達していなかったと思う。それを3ヵ月続け、夏、試験本番に挑む。手ごたえがあった。合格の基準が低いこともあるが、全十数科目のうち1科目か2科目を落とすくらいですみそうであった。そして、次の年にその科目だけ受ければよいと思っていた。要するに、堂々と心身ともにゆっくりと休み、回復できると思ったのである。秋、なんと、結果は合格であった。

高校の恩師に報告したく、また1年生の時の同級生への意地もあり、秋にあった工業高校の文化祭へと出かけた。先生方に会うことができた。昔の同級生とも会う。何か引け目を感じ

じる。かつての同級生は3年生である。時間の経過を感じた。それでも、ある先生は、「追いついちゃったよ」と言ってくださった。救われた。それでも将来を考えると何もなく、暗さは残ったままだった。

親は、私が高校を中退して、なおかつ大学入学資格検定に合格したものだから、学歴を考えてくれ、仕方なくではあるが大学受験を認めてくれた。国立大学限定ではあったが。しかも、その年度に受けろという。うれしい反面、予定がくるってしまった。1年間、心身ともに回復させなかったのであるが、またムチ打たなければならなくなった。無理がもう一度始まった。しかも、合格するわけがないのである。集中力もなく3ヵ月勉強しただけの学力なのだから。

やはり、合格できなかった。できるはずもなかった。親も私も混乱していた。私としては将来を考えれば大学に行きたいが、それどころではないくらい心身ともに衰弱しきっていた。親も気持ちばかりはやり、大学へ行きたいのなら今度は塾へ行けというのである。私にとっては、またしても今更であった。それでも、最後のチャンスであり、それを拒むこともできず、やるしかなかった。そして、受験にたどり着く前にとうとう本当の限界が来てしまった。そこから、世の中の人と言うところの長い「引きこもり」の状態になってしまう。部屋も出ない、家からも出ないものではないが、「引きこもり」である。自身としては、どうしても必要な静養だった。



## 第2章 障がいの定義を考える

### 第1節 分類と変遷

「引きこもり」についての定義や見解はさまざまである。ホームページ「井出草平の研究室」引きこもりの定義にある、厚生労働省『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン』（2010年）によると、「様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学，非常勤職を含む就労，家庭外での交遊など）を回避し，原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念である。」とある。

また「引きこもり」は、単一の疾患や障害の概念ではなく、一線を画するともされる。そして、その実態は多彩である。

しかし、引きこもりが長期にわたり結果、実際の疾患や障害に移行してしまうことや、何らかの診断前の疾患や障害が隠れている場合もあるとも言われる。

それでは、「障害」とは何か。まず日本での障害の法律における定義として「障害者基本法 第二条」は、以下を定める。

一 障害者 身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の心身の機能の障害（以下「障害」と総称する。）がある者であつて、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう。

二 社会的障壁 障害がある者にとって日常生活又は社会生活を営む上で障壁となるような社会における事物、制度、慣行、観念その他一切のものをいう。

また、世界に目を向けると、WHO（世界保健機構）は、何とか世界標準の概念規定を作成しよう取り組み、これまでに2つの定義を生み出してきた。

最初の試案は、1980年の「国際障害分類（ICIDH）」で、以下の3つのレベルでとらえようとした。

1. 「インペアメント（機能・形態障害）」
2. 「ディスアビリティ（能力障害）」
3. 「ハンディキャップ（社会的不利益）」

「インペアメント」は生物学的、医学的診断による障害の1次レベル。「ディスアビリティ」は機能・形態障害から生じる「行為能力」が低下した2次障害レベル。「ハンディキャップ」は障害があるために人権が侵害される3次レベルをいう。

そして、その後「権利や平等」への機運が高まり、ICIDHモデルの改正運動が展開され、WHOは2001年に「国際生活機能分類（ICF）」を定めた。これは新たな障害の定義とされ、「障害」というマイナスの視点を中立的かつ包括的にとらえるために「生活機能」という概念を用いて説明している。それは、人が「生きる」ことの3つのレベル（生命・生活・人生）に対応させる。

1. 「心身機能と身体構造」

## 2. 「活動」

## 3. 「参加」

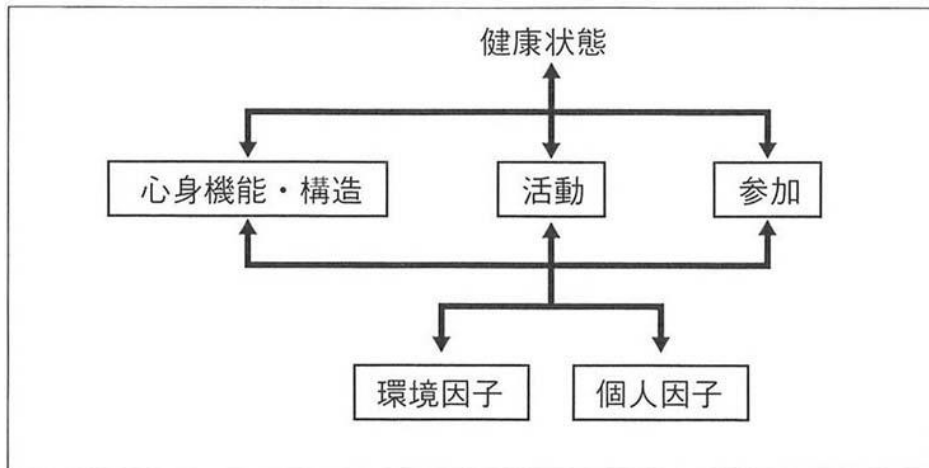
「心身機能と身体構造」は、生命の維持に直接関係する、身体・精神の機能や構造のこと。「活動」は、生活行為すなわち生活上の目的をもち、一連の動作からなる、具体的な行為のこと。「参加」は、家庭や社会に関与しそこで役割を果たすことと表わし、相互に影響しあう関係であるとした。さらに、それらに影響する3つの要素、「健康状態」、「環境因子」、「個人因子」を加えている。(図1参照) この概念的枠組みは、「相互作用モデル」と呼ばれ、1980年の一方的な運命論モデルに比べると、「障害」の相対化が格段に進んだと言われる。

「障害」の歴史の変遷をみると、しだいに環境・社会要因の及ぼす影響の重大性が明らかになり、障害分野における法整備が世界的広がりを見せ始め、「障害のありか」を社会に求め始める。1990年「障害のあるアメリカ人のための法律 (ADA)」が制定された。ADAは、雇用、交通、建築、通信といった主要な分野のバリアフリー、差別禁止を法的に保証する制度である。ADAは世界的な広がりを見せ、2000年には、EU加盟27カ国が雇用分野での差別禁止文書を採択している。やがて、2006年国連において「障害者権利条約」が採択される。日本でも、ようやく2013年6月に「障害者差別解消法」が成立し、翌年1月に「障害者権利条約」が批准された。(加納恵子『基礎社会学』〔新訂第四版〕、世界思想社、2018年、より引用)

障害をめぐるさまざまな議論に、障害は個人の問題か、それとも社会の問題かというものが存在する。障害の原因がどこにあるのかといった考え方に「医学モデル」と「社会モデル」がある。「医学モデル」は障害を個人の問題とする考え方で、「個人モデル」とも呼ばれる。それに対して「社会モデル」は、社会のなかで自由に生きる条件が整ってないことが「障害」であり、社会のほうに問題があるという考え方である。どんな人でも生きやすい社会をつかっていくことで、そうした問題を解決していく、人権的な観点に基づく。

近年では、社会モデルをベースに考えられることが増えてきている。ノーマライゼーション、インクルージョン、ダイバーシティといった言葉が使われることが多くなっている。ノーマライゼーションは、障害の有無にかかわらず、人びとが等しく生きられる社会を目指す考え方、誰もが「ノーマル」に生きていけるための社会理念である。インクルージョンは、どんな違いのある人でも社会に包み込み、ともに支えあっていこう、という意味を持っている。また、ダイバーシティ、は「多様性」という意味として使われ、障害もその中に含むものである。(コラム「“しょうがい”って何？ 障害者福祉の制度、法律、サービスの言葉」より引用)

図1 国際生活機能分類 (ICF) の生活機能構造モデル (2001)



出典、ホームページ

[https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/norma/n301/n301016\\_02.html](https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/norma/n301/n301016_02.html)

(2020年7月6日現在)

#### 参考文献

ホームページ、「井出草平の研究室」、引きこもりの定義、<http://www.idesohei.net/index.html>

(2020年7月6日現在)

加納恵子『基礎社会学』〔新訂第四版〕(世界思想社、2018年)「13章 障害のありか」162頁

ホームページ、DIVERSITY IN THE ARTS TODAY、コラム「“しょうがい”って何？ 障害者福祉の制度、法律、サービスの言葉」、解説：岡部兼芳、文：佐藤恵美、2017年、

<https://www.diversity-in-the-arts.jp/stories/2090> (2020年7月6日現在)

#### 第2節 「ひきこもり」から「障がい者」へ

18歳の時、大学受験の失敗後、「ひきこもり」となった。自分自身としては精神的にも弱っていたものの、身体の疲れ、体調が一番と考え、そこさえ回復すれば何とか社会復帰できると考えていた。

とにかく疲れており、何も考えず心も体も休めたくて仕方がなかった。始めのうち、体力をつけようにも気力はわからず、ただ横になって休んでいた。それでも、体を動かしていないため睡眠のリズムは崩れ、質も悪くまったくとっていいほど疲れは取れず時間は過ぎていった。家族からの圧力もあった。休みたくても周りは良くは思っていない状況であった。また、まったく外に出ないわけでもなかった。ひきこもっているという後ろめたさから、自転車で中学の学区外、出来れば市外まで少々無理をして行き、本屋や川辺などで小休憩をしては帰ってきていた。知り合いに会いたくなかったのであった。落ちぶれたと思われたいなかった。そのようなわけで、家にも出掛けても安心して心を落ち着けることが出来る

場所はなかった日々が続いた。

18歳から25歳の頃まで、私にとって一番欲しいのは「安心」であったと思う。ひきこもっていて常に緊張が続くので、回復には向かわないのである。勝手な想像であるが、始めは3日、本当の意味で休むことが出来れば回復できたかもしれない。その途中で、親が我慢できずに安心を奪う。またやり直しになる。今度は1週間、次は2週間と休まなければならない時間が長くなっていき、1ヶ月、3ヶ月と、最終的には長期のひきこもりとなってしまう。例えて言うなら、1週間で4回よりも1ヶ月を1回欲しかった。

ひきこもりの間でも、自転車でのサイクリングは嫌いではなかったのも、次第にいい運動と思うようになっていった。そうすると私の性格は極端にはしり、頑張りすぎてしまう。体力をつければ、心身ともに健康をとりもどせると無理をした。無理をしては体調を崩し、少し回復すればまた無理をするの繰り返しであった。ますます、焦りは募り悪循環に陥っていた。そうして、年単位で時間が過ぎてしまうことになる。

その途中の1995年過ぎの20歳を越えた頃、ウインドウズ95が発売された。親も私を見かねて、パソコンを購入してくれた。私としては、なんで今更との思いもあった。しかし、嬉しかった。工業高校の建築科に進んでいた私は、もし大学に行くことが出来るのならば情報技術者になりたかったのである。そうして、サイクリングの行き先が、隣の市の図書館になり、コンピュータの勉強を趣味として始めたのであった。勉強が出来た頃からは時がたち、まだまだ体調もおぼつかず、ほとんど頭に入らなかった。それでも、ひきこもっている中の唯一の楽しみであり、希望でもあった。

2002年、私は基本情報処理技術者試験を受けることにした。趣味としてのレベル、回らない頭ではある。それでも、親や周りへ力を示したい気持ち。何より自分自身の状態の確認のために数ヶ月前から試験用の本を買い勉強をした。この時も、先の大学入学資格検定の時と同じく、絶対に受かることは無理ではないかと思うくらいに、本を読むことだけでさえわずかな時間しか集中が持たない酷い体調の中、やるだけのことはした、というだけになってしまった。その結果、合格することが出来た。点数的にもギリギリではない合格だった。私としては以外であり、そして嬉しかった。

合格したことは、自信を取り戻すのには十分であった。だが、社会復帰となるとこの資格を生かす仕事につくには、新卒ではないこと、私の立場では実務経験を要するという求人くらいしか情報収集が出来ず、将来への希望や、生きる気力にはつながらなかった。結果的に社会的ひきこもりは続いた。

合格から3年後の2005年、家族が探してきてくれた、メンタルクリニックに初診でかかり始めた。その約1年前あたりから、ますます体調が悪くなる。原因の1つは、こだわっている勉強で、もしすぐに大学に入ることが出来たとしても、卒業するころには年齢が30歳を超えてしまうこと。更にもう1つ大きな原因は、そのころからさかんにテレビや世間で「アスペルガー」という言葉が頻繁に聞かれ始めたことである。それまでにも、私は中学時代に自分自身に何かしらの気質的なもの、例えば当時で言う自閉症などを考えたこともあ

った。完全には当てはまらないと考え否定したが、その他にも私の知らない病気や、障害があるのではないかと考え不安を感じていた時期があった。その当時の悩み、不安が「アスペルガー」や「発達障害」という言葉で、一挙によみがえってきたのである。

勉強にこだわっていたのも、客観的数字でそれらの不安を払しょくしようとしていたのかも知れない。「ひきこもり」をしたあと、生育環境、金銭的環境、社会環境などのせいにして、もう一度自分というもの、「アイデンティティー」、「自我」を綱渡り状態ながらも作り直してきた。しかしそれも、上記の言葉でまた壊れようとしていた。耳に入ってくる情報で、当事者自身が発達障害と知ることによって、「楽」になった、救われたというものも同時に多くあった。しかし、わたしが「ひきこもり」になってからもう一度作ってきた自己理解は、自分ではない何かの原因を理由にして、自身の問題ではなかったという形であったため、わずかでも「自身に原因がある」という可能性に耐えることが出来なかったのである。

私は、障害に対して差別の気持ちは無いつもりでいる。それでも、それが自分自身に対して向けられた時、自分を成り立たせている精神を保つことは出来なかった。完全に当てはまり逃れることが出来ないと判断できれば、かえって良かったかも知れない。しかし1年間、当てはめては打消し、打ち消しては当てはめるの繰り返し。自分自身というものへの理解が崩れ、壊れていったが、今現在、この頃のことを正確に表現することは出来ない。精神はどんどん衰弱し、クリニックにかかるひと月前からは極度の神経過敏になっていき、家族や知り合いの説得もあり、メンタルクリニックの受診を受け入れた。今思うと、もし、もうひと月遅かったならばと怖くなる思いである。

ようやく自分自身の不調を、精神と認め治療を始めるのだが、精神科の知識などないため、どのように、何を話し、先生とのかかわり方など、右も左も分からない状態での始まりであった。ただ初診の時、医師に「治療は、この10数年のものですか、それともこの1年のものですか」と質問し「今、の治療」と返ってきた。これまでの経緯ではなく、現状への治療であるという意味に受け取った。その言葉がなければ、もっと私は迷子になっていただろう。

薬は何度も受診したあとに出される慎重なものと思っていたが、もう初診か2回目の受診で処方箋を出された。最初こそとまどったが、ひと月ものすごく怖い思いをしていたので、もう飲むしかないと思った。そのおかげで、神経の過敏さだけは、かなり抑えられた。それでも私としては、もっと話を聞いてもらいたく受診の時間は短いと感じていた。主治医との相性も、他の医師とも初めから信頼関係を作るまでにはなかなか至らなかった。

本格的に自分でも意識して療養に入るが回復はおぼつかなかった。とにかく休めば回復につながると信じて、ひたすらに休んだがかえって頭がぼんやりと混乱したり、考え込んでしまうなど、苦しい時間が長く続くことになる。診断名も定まるまでかかることなど、知らないことばかりで焦る気持ちも膨らんだ。

たどり着いた診断名は「気分変調症」。軽度の鬱が持続的に長期にわたり続くというものであった。この名前も、私の状態とともにのちに「反復性うつ病性障害」に変わることになる。

長く通院しているとはじめ作れていなかった、信頼関係もでき始めた。何を話せばいいのか、治療の時間は目どがあってないようなものな事、薬だけでも診療だけでもよくはならないことなどが分かり始める。これは、自分がタブー視していた世界を知ることでもあった。それでもなお、わたしは診療時間の半分以上は、苦しい苦しいとだけ話していたように思う。

「安定して悪い状態」が続き、苦しく、焦る日々が続いていた。そんな、2010年「地域活動支援センター」という「福祉」につながる。この時も家族が探してきてくれた。精神の病、障害と頭では認めていても、こころのどこかでは、まだ完全に受け入れきれずにいたのだと思う。その施設に通ううち、一見元気に見える人の中にも障害などを抱えてる人がいることを知る。現実を見たことで、世界観が変わり始め、将来の就職や公的な支援を受けるために、ようやく「精神障害者保健福祉手帳」の交付を受ける決意をした。翌年には、ハローワークにも、障害者の枠で登録をした。

2012年に、就労継続支援B型に通所を始めた。「通う」ことにもう一度慣れることに挑戦する。そこでは、集団での内職作業、食堂でのウェイトラー、館内の掃除などをしながら、社会復帰や将来の就職への準備をする。私は、全員がする掃除と、内職作業をほとんどの時間していた。ほとんど休むことなく通所をすることが出来た。

2014年、市からの委託を受けた障害者就労支援センターの助けを借り、障害者枠で就労をした。センターは、履歴書作成の手伝い、面接の同行、簡単ではあるがジョブコーチ、数週間に1度就労先へ来てくれ様子や職場の職員との面談などをしてくれる。就職した先は、東京都内のホームセンターだった。仕事は清掃であった。やる気もあり真面目に働いたが、自分の能力以上に一所懸命になってしまいオーバーワーク気味になったことに加え、私は潔癖症がもともとある。清掃の中でもトイレ掃除をすることによって、仕事の最中は頭がしっかりとしているため平気だが、仕事が終わり家に帰って気を緩めると、その潔癖症が出てしまい食事のお米を研ぐことが出来なくなってしまっていた。そうして、これ以外にも神経質さが出始め、心身が疲労し体調を崩し仕事を休みがちになり、結局1年半で続かなくなってしまい退職する。

### 第3章 展望

#### 第1節 公共哲学の視点から

公共哲学を考えていくにあたり、山脇直司(日本の哲学者。専門は公共哲学、社会思想史、ドイツ観念論など。星槎大学学長・東京大学名誉教授)著作『公共哲学とは何か』(筑摩書房、2004年)を題材として学んだ。その中で山脇は、社会をこれまでの「公私二元論」から、「政府の公、民の公共、私的領域」への転換を訴えている。この中の「公私二元論」は政治や司法、国家などを「公」、それ以外の領域、個人の幸福追求や家庭はもとより経済や宗教も「私」の領域とみなしている。

そこから個人が社会と向き合う時に新たに「公共」を個人の尊厳が守られ、軍や政治や市場に押しつぶされずに暮らせる場のコミュニティとして提案している。「自己と他者のコミュニケーション」という視点で考えていき、公共性は、他者とのコミュニケーションのなかで個人の自己実現や尊厳が発揮されることであるととらえる考え方である。

ここでの「公共」という概念を通して、私はあらためて社会に受け入れられたいという気持ちが生まれた。社会に受け入れられたいと思う時、これまでに私の中に抱えていた怒り、いらだち、悔しさなどが客観視され、消えていくのを感じている。

この気持ちはどこから生れたのだろうか。不安、不信などの感情の中では、社会との接点は負の面ばかりが見えてしまう。公共哲学の視点から社会を見つめ直した時、同書に出てくる西洋哲学の人物の言葉を通して示唆が与えられた。そして人は、特に障がい者は「なぜ自分だけが」という思いから解放された時、社会の一員としての意識を持つとの考えに行きつく。

個人が社会に溶け込もうとする時に、不安や不信という抵抗因子があると考えている。それを取り除かなければならない。私にとってはそれが、「安心」と「自己実現」をできる場を与えてほしかったということである。

同書の中でジョン・ロールズ(1921—2002)の言葉を見つける。

「正義論」(1971)の中でロールズは、第一に「各個人が最大限に平等な自由(政治的自由、言論の自由、良心と思想の自由、心理的圧迫と肉体的暴行や殺傷からの自由、恣意的逮捕や押収からの自由など)をもつことの保証」、第二に「社会的、経済的格差(不平等)は、それが認められるにせよ、最も不遇な人々の利益を最大限にするよう、また機会均等の原則のもと、すべての人々に開かれた職務や地位に付属するよう、配備しなおされること」と記している。

第一の原理に「自由」について書かれているが、これは社会に参加しようとするにあたって必要な「安全」と「安心」を保証するものである。この原理がなければ、他にいかなる権利があろうとも、社会に参加しようとする時の抵抗因子を取り除くことは出来ない。

これは、最大であり、最低限の権利である。私が「ひりこもり」の状態にあった時、疲弊しきっていて、まず休み、回復をはかりたかったが「安心」していただける場というものがない

かった。そのようなときには、いくら社会参加しようと努めても、自分を受け入れてくれる場もあるように思うことが出来なかった。今、環境が整い必要であった場が存在すると、努力からではなく、湧き上がるように社会に溶け込みたいと思う気持ち、意欲が生まれている。この環境が、私「個人」と「社会」をつなぐ役割を果たしてくれたからである。

第二原理にある、「最も不遇な人々の利益を最大限にするよう」という考えは、障がい者の立場からも歓迎されるべきものであるといえる。「自由」についての記述の方が優先されるが、この言葉は力強く人を社会に迎え入れるものとなる。機会均等の原則に関しても、そのことは同じように働く。

人は、個体それぞれに異なり、環境もそれぞれに異なる。環境が異なるということは、自己実現をしていく上での、「スタートライン」が異なるということでもある。この場合の「スタートライン」の差異とは、社会に参加するための力をつける環境の違いだと考えている。

私の場合、「スタートライン」の差異を埋めるために疲れ果ててしまったという過去がある。機会均等の原則は、社会に参加しようとする際に、「スタートライン」の差異を完全にはないものの吸収してくれるものである。それによって人が、社会に対する信頼という意味で、社会参加に対する意欲に関して増す方向、積極性も生まれる方向に働くものと私は考える。

私にとっての自己実現に必要なものは「学問」であり、それを学ぶ場である学校であった。確かに努力で手に入れることも可能であったろう。しかし、私は努力したものの「金銭面」、「体力」、「周りの理解」などから、社会参加するための環境そのものを心身の「ダウン」という形で失ってしまった。今、その環境があり成長していく自分を見て、必要なものであったとあらためて感じる。

生涯学習が叫ばれて久しい。私個人をとっても、40半ばであるが「学問」を通して変わって行く自分がある。今は社会の側の環境の変化も激しい。その事は、常に学び個人の側も変わって行かなくてはならないということでもある。その事に対する機会均等とは何か。同時代的な機会の均等だけでなく、人は人生をどこからでも「いまさら」ではなく「今からでも」と思える社会であって欲しい。人生において、幸福な時期、不遇な時期はさまざまに違い、時代によりに不遇な時を持ったとしても、その後にチャンスがあるべきである。

#### 参考文献

山脇直司『公共哲学とは何か』（筑摩書房、2004年）142頁

#### 第2節 シャローム大学校へ

障がい者就労でのホームセンターの仕事を退職後、3ヶ月ほどは休むことに専念した。それでも、神経質になってしまっている部分は、取れて行かなかった。更に年齢のこともあり将来への不安から、就職のことも頭から離れることはなかった。休むと決めていても、インターネットで、民間の障がい者就労を橋渡しする会社のサイトを見て回っていた。見て回る



ほど、年齢、履歴、持っている技術などから、わたしに道が開かれているとは思えず将来を悲観してしまい、「うつ」の症状も波が出てしまった。

3ヶ月と決めていた休養も6ヶ月に差し掛かったころ、以前に通っていた地域活動支援センターから一枚のチラシをもらう。「就労移行支援事業所シャローム所沢」のものであった。

就労移行支援事業所とは、2年間通うことができる、「体調を整えること」、「社会への適応」、「パソコンなど就職に生かすことのできる技術の習得」などのサポートを受けながら、主に障がい者就労を目指すための事業所である。

就労移行支援事業所については、前回、市からの委託を受けた障害者就労支援センターを利用すると決める前に2ヶ所ほど別の就労移行支援事業所を見学に行っていた。年齢から就職を焦っていたため、障害者就労支援センターを利用し就職を優先したために見送ることになった種類の施設である。

そのままただ休んでいても体の疲れはとることはできても、精神は不安定になっていくと思い、「就労移行支援事業所シャローム所沢」にアポイントを取って訪ねる。

そこは、天井が高く、窓も広く明るい光が入り、内装も綺麗であった。それだけでも、わたしに必要な環境であると思え、理念を感じる場であった。空間自体を大切にしているのが伝わってきた。そして面談をして、障がい者の施設に今まで持っていた「訓練」という言葉からいなく型にはめていくというイメージを感じず、わたしの可能性を広げてもらえると感じた。そして、2016年の4月から「就労移行支援事業所シャローム所沢」に通所することに決めた。

通所して、まず休まず通うこと、心をほぐすことから始めた。個人の時間は私の中では得意なパソコンの学習から集中的に行った。また、この事業所ではコミュニケーションを重要視していて、スタッフとの面談、利用者が集まって行うワークなどが充実していたので積極的に参加した。

就職という最終目標に向い焦る気持ちを押さえながら体調管理をし、こころも明るさを徐々に取り戻していった。

それでも、わたしより早く利用し始めていた人の就職が決まると、心強くもあるがやはり私も就職が頭の中をしめリズムを崩し、体調に影響したこともある。意気込みすぎているのか、心身が疲れてしまい休みがちになった時期もあった。

前回の清掃の仕事は自分に向いていないと分かっていたものを周囲、家族へ私がただ怠けているのではないということを分かってもらいたく選び、また克服もしたかったため挑戦したのであった。結果として体調は悪化し休んでしまった事や1年半で退職してしまう結果となり、自信と挫折の両方を体験した。

半年から1年たつ期間、いよいよ就職に向け動き出すにあたり、今回は自分がやりたい仕事ではなくても、しっかりと続けることができると思えるものに就きたかった。事務職を希望していたが、パソコンを少し触ることが出来るだけで経験もなく、応募しようと思える求

人すらなかなか見つけることが出来なかった。

1年半に迫ろうという時、私に向いていると思える、もう一つの職種で職人としての仕事の求人があった。障がい者求人で、革細工の加工や組み立ての工場の仕事でやってみたいと思った。履歴書を提出し面接も受けたが、その中で「職人」を目指したいとの意思を伝えた。結果は不採用であった。面接にもついて来てくださったスタッフの方によれば、採用の段階で、職人と言うよりも工場のラインとしての仕事なので「職人」を希望する私とは合わないのではないかとのことだった。

就労移行支援事業所は2年間という期間が決まっているため、力をつけもう一度この施設を利用しようと、この応募を最後に6ヶ月残して退所することを決めていた。周囲、家族も清掃の仕事をしたことや、この就労移行支援事業所シャローム所沢に通い就職に取り組んでいたことを認めてもらい私が本当にしたい勉強などをさせてもいいと言ってくれていた。場合によっては昔かなわなかった大学すらチャンスをもたらえた。

この退所をするという決断は、しがらみや周りの圧力からではなく、人生において初めて自分の意志で決めることができたと思えるものであった。逆に言えば、今度こそ言い訳のできない決断であり「責任」も生じるのであるがそれすらも嬉しかった。

そのため、もちろん不安もあるが自分のペースで体調を管理し、好きな勉強をできるという今まで欲しくて仕方のなかった時間を手に入れ、自分づくりをすることができた。今度こそしっかりと社会に入ってきてみたいと、自己の様々な面を見つめ直し強さを手に入れる期間としていた。

それと同時に、自分の力の限界。特に自分ひとりで出来ることには限りがあり、時期が来たならばもう一度サポートを受けたいと思っていた。この間、シャローム所沢ともつながりを持ち復帰する場合に備えていた。そんな中、シャローム所沢の運営団体である一般財団法人福祉教育支援協会が「シャローム大学校」を新たに設立するというを知った。

シャローム所沢を退所後、大学受験のセンター試験を2回受けた。そのことで感じたのは、自分の力の足りなさや限界、「うつ」と共に生きていかなければならないという現実であり、回復し元に戻るのではなく、前を向き自ら道を捜していくというものであった。そのためには私の場合は、やはりこだわっている勉強をするしかないとの思いを強くしていた。

そこへの、シャローム大学校の設立の知らせであった。サポートを必要とする人のための教育の場としてつくられる学校とを知ることを知る。一般の大学を目指してはいたが自身の力、体調が整っていない状態で、もしもではあるが合格したとしても自分には通い続けることは無理だと思っていた。そのため、このシャローム大学校は私にその時、必要な環境があると感じ応募した。

入学試験もちろんあった。志望動機の小論文と面接があり、入学の合格が決まる。2019年4月、みんなの大学校の前身である、シャローム大学校へ入学する。

## 第4章 自己実現への道

### 第1節 自分にとって学ぶとは

私は幼い頃から「生きづらさ」を感じていた。その正体を自分の中に、自分の中で探し続けてきたように思う。それが、徐々にではあるが外の世界、社会へと向き始めるとより一層の違和感をつのらせていった。何か合わないのである。

社会と折り合いをつけるために「知識」により自分を装うことによって、つながりを持つようとしていた。しかし、周囲の人に興味がなかった。興味の方向が合わないため、自分の興味のないことも勉強し、合わせるようになっていったのである。

小学校時代には、話のきっかけづくりとして「野球」を好きでではなく知識として勉強し溶け込もうと努力したりもした。そのようなやり方でも、続けているうちに他の人の感覚が何故か「わかる」という感触を得ていくのであった。「わかる」ことの楽しさを覚えてからは、段々と違和感が薄れていった。

当初は手段であったかもしれない勉強自体も楽しく、奥深さを感じ興味を持っていく。特にコンピュータに興味を持ち、所持はしていない時からプログラミングの勉強などをした。それらを通じて将来の仕事についてなど、社会との関わり方の考え方も変化していった。知識としての表面だけでなく、もっと学んでみたいと思うようになった。また、自分の力を生かし生きていくためにも学びたいと思うようになっていったのだった。

過信と無理から、心身のバランスを崩して「ひきこもり」、「うつ」へとなってしまったが、それらからの回復の手助けもまた、学びからだった。自分自身を定義しているもの、アイデンティティを再確認、再構築しなければならなかった。自然にではなく、考え意図的に造ってきた自己が矛盾だらけになってしまっていたのである。作っては崩れ、作っては崩れを繰り返し、今周りの助けを借りてようやく実が結び始めている。

また、私は一時期、障がい者として、ただ細々と生きて行こうと思っていた。落胆しある意味では決意さえしていた。障がい者として、型に押し込められる、自分自身でもはめ込んでいく感覚に襲われていた。

それが、学ぶことにより、自分の人生を生きようと思えるようになった。学びから、ものごとを見る視点が客観的、多角的になり新しい生き方が見えて来るのだった。「生きづらさ」についても、現実に存在する障がい、病気、社会問題など自分を苦しめていたものの正体を探っていった。それはつらい作業でもあった。あらがおうとするほど自分にも向けられる「諸刃の剣」として襲い掛かる。戦うのではなく、現実として受け止め、徐々にではあるが受け入れ始めると、それらの「知識」は味方となっていった。その先にあったのは、将来に対する開けた視界であり、この世界を生きていきたいと思える感情である。

私のこれからの一歩として、社会にどう受け入れてもらうかという課題がある。これまで私は、自身に足りないことを知識で克服しようと背伸びをしてきた。もちろん、知識から得られるものは大きい。しかし、経験をつみ重ねたものには及ばない。

知識からだけでは、いざその瞬間に出会った時、頭が、体が動かないのである。更にそこから自信が無くなり、未来に何かが起こった時「あれが起こったら、こう行動する」という予防線を張るような思考におちいる。そうして、行動が余計にぎこちないものとなっていった。そのことを改め、何かが起こった時にその時その場で対処できる思考の仕方に変えていきたいと思っている。

『生涯発達心理学－認知・対人関係・自己から読み解く』（有斐閣、2016）の中に「生涯にわたる自己の発達において、核となるアイデンティティとは何かと言う問題は、青年期に限らず一生涯向き合い続けていく問題であるともいえる。なぜならば、核が揺らげば全体像はアンバランスになり、その表象が曖昧なものになってしまうからである。ただ、この青年期という時期に核となるアイデンティティが確立されなくても、私たちは生涯のうち何度もその核が揺さぶられる出来事に揺さぶられることがあるから、つねに核を探し求める努力をしつつ、起りうる出来事を柔軟に受け止めながら生きていくことが肝要なのだろう」と書かれている。このようにありたい。

では、そのために何をして行けばよいのか。その事を考えた時、私は私なりに経験してきたことがあることに気づく。決して「自分だけが」ではなく、苦しんできた経験である。学ぼうちに分かり始めた自分を苦しめていたものをつきつめてきた結果、その事によっても私自身が変化できていたことであった。

私にとっては大きな発見である。学ぶことにより、現実を突き付けられることは辛い。しかし、得るものも大きかったのであったのだから。その変化が成長であるならば、私はもっと学ばなければならない。今はまだ、学校という場所においてだが確かに社会と接点を持っているのである。もちろん働きたい。しかし、今できる精一杯のことができなければ、その先にもできないだろう。今は学び、社会との更なる接点を見つけ、緩和剤としたい。

私には、現実辛いものであった。それが今、環境が整うことによってやわらいでいる。その事はこれから将来についても起こりうるのであると信じられるようになった。現実との折り合いを固定的ではなくバランスを取りながら見つけていく。倫理観をもって物事を考え、自分のペースでも着実に行動に移していくことができるようになること。そのためにも、学問を学ぶことは有意義に働くと考える。

#### 参考文献

鈴木忠・飯牟礼悦子・滝口のぞみ『生涯発達心理学－認知・対人関係・自己から読み解く』（有斐閣、2016年）107頁

#### 第2節 どの時点からでも始められる社会

今、私が障がい者として社会にもう一度、あるいは初めて入っていこうとする時、まず乗り越えなければならないのが、精神の障害であるため体調が悪かった時のことである。体調のせいだけにしてはいけないが、「することが出来なかったこと」、「周りにかけてしまった、

失敗や迷惑」、そして「恥」である。

例えて、これら3つのことが一挙に押し寄せる場面が、冠婚葬祭である。

二つの具体的な出来事として、父親が亡くなった時と、弟の結婚を取り上げる。

特に父の葬儀の時には、弟と一日たまたま連絡が取れず、母の負担を減らすため長男である私が表に立たなければならなかった。この時の私にとって押し寄せてくる社会とは、二重の意味がある。

まず、顔を知っている親戚の社会である。人間関係を作ってこなかったため、そこに出ていくことそのものが難題であるが、どのように接するかはさらに難しい。長らく逃げていたことから、話そうとする時、以前の子供としての言葉遣いと、大人として振る舞おうとする言葉遣いが、混ざってしまうのである。親しくとの口語と、敬語が混ざり、関係が安定せず、なれなれしくなってしまうたり、他人行儀になってしまい、失礼に当たるのである。

もう一つの社会は、さらに外側、世の中のあったこともない人達である。こちらはもう言葉は敬語後で安定する。その人に失礼があってはならないのはもちろんだが、家族、親戚に恥をかかせてはいけないことが最重要である。知識だけのいきなりの実践での礼儀作法は、緊張につぐ緊張である。間違いや、出来ていないことが多々あったに違いないが、考えるのは出来る限り、「私」の恥で済むようにすることであった。もう、記憶もあいまいで、それすらも怪しい。

話すこと、言葉遣いだけでも迷いが生じたが、実際の式ではまず、礼服を正しく着ることから始まる。寸法は、何とか親しい親類に直してもらおう。慣れないネクタイを何度もやり直しながら結ぶ。恰好だけは繕い、それまでの反省から出来る限り言葉は発しないようにする。見よう見まねで、最小限のことだけに集中した。父の死を悲しんでいる時間はないに等しかった。実感がわいたのは数年が経ってからであった。

返して、弟の結婚式の時は、体調も悪い時期であったため、もう何もしないことにした。ただその場に行って、座っているだけである。よほどの食事のマナーの悪いことさえしなければいいというくらいである。ただ、病気である私が、その場に居ていいのか悩み、迷惑をかけているのではないかなどを最中、考え続けていた。

二つの出来事は、私を社会に帰すきっかけとなるかも知れなかったが、その後はもとの状態に戻ってしまった。何もすることが出来なかったという思いと、余計なことをしていないかという心配だけが残った。働かない頭でやり過ぎたという思いしかない。

出来なかつたこと、中でも経験は今から遅まきながらでも積んでいくしかない。

失敗や迷惑、過去の出来事は変えることはできず、社会に入りこれからの私の行動によって、少しずつ少しずつ信頼を得ていくしかないと思っている。

そして、ふり返り、明らかにしてしまった失敗はどうしようもなく、恥となってしまう。自分自身がかいた恥はそれだけでも苦しい。それだけでなく、自分のいたらなさから他の人がかいてしまったであろう恥はその比ではなく、私を苦しめる。恥の部分、これは自分との対話の中で解消するしかなく、時に精神状態を一番悪い時期に引き戻す力ともなり、その時

はただ耐えるしかなくなる。

これらは、それでも私に近い人に対してだが、社会に対しても同じように「足りない」のである。これらのことを大目に見て欲しいというのではなく、ただ自覚しその途上にいる者がいることだけは理解してもらうことができれば幸いである。

これらを一つ一つ丁寧に乗り越え、こなしていかなければならない。過去に戻るころではなく、どう向き合い更には前を向くかであると思っている。

今、ピアノを習っている。今しかできないことであり、指先、頭、ころころにも良いと思い通い始めた。伸び悩んだり、上手くいかないとき、講師から、「過去の出来ていた時に戻ろうとするのではなく、もう上達しているのかも知れないから、今その時の状態を感じ取り、その時の最善を捜すとよい」とのアドバイスを何度も受ける。

病気についても、同じことが言えるのではないか。どうしても体調の良かった時に戻ろうとしてしまう傾向がある。もう起こってしまった事、体験は消すことができないのである。たとえ戻った気になっても、すぐに悪い状態になってしまう。その時の、自分を認めなくてはならない。そこから始まる。

自身に押し掛かる過去の「記憶」が自己の「歴史」として認識できた時、真の意味で前を向き解放されると信じ進んで行きたい。

『社会学』（有斐閣、2007）の第9章、医療・福祉と自己決定に自己決定論と自己責任論の関係について次の記述がある。

「自己決定論の隆盛と並走するかのように存在するのが自己責任の議論である。決定がもたらす結果がどのようなものであれ、自分で決定したならば、決定者がその内容を甘受すべきであるという発想がそこにはある」。

私の望みとして書かせてもらえれば、「結果としての自己実現」ではなくても、その途中経過としての「自己実現への道」は開かれていて欲しいと願う。この場合の自己実現とは、具体的な職種や、夢のたぐいではなく、一生涯続く成長の自己実現を指すをしたい。

さらに社会学はこう続ける。

「したがって、自己決定が自己責任とともに強調されるならば、他者の責任関係を分断する潜在的機能を発揮しうる。しかし、それは、不確実性に満ちた諸状況・諸条件のなかで、そのことの責任をとりえない関係者が責任を当事者に転嫁するために自己決定が主張されるという可能性もありえる。そのような文脈の理解なしに、自己決定だけが高く評価されることには注意を要しよう」。

自己実現は自己決定の連続でもあることから、この二つは密接に絡み合っている。そのことから、自己実現を求めることは責任をも受け止めなければならないのは事実である。しかし、書かれているように諸状況、諸条件、すなわち、ある「環境」のなかでの決定であるからには、責任もその範囲になるのではないか。「環境」を「他者」、「社会」とするならば、その「環境」のなかで責任をとりうる力をつけることが必要となる。障がい者に限らず、「環境」が整って初めて自己責任を受け止められるのである。

「自己実現への道」とは「環境」、この場合「社会」の中で責任を持って生きるための力をつける過程である。自己完結な自己実現に終わらないためにも、その途上にいる時こそ、「社会」と関係を持ち続けることが大切であり、自己実現に向かうことであると考え。

この「自己実現への道」とつながることイコール、「社会」とつながることでもあると思う。それは、特に障がい者にとっては、どの時点からでも始められる、生きられる人生がある社会であって欲しいということでもある。

#### 参考文献

長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志『社会学』（有斐閣、2007年）306頁

## 第5章 まとめ 望む理解とその形

私、障がい者に限らず、苦しむ時期、社会に出ようとする時期には「承認要求」や「理解してほしい」という思いが起こるのではないだろうか。こと障がい者は、「何故、自分だけが」との思いから抜け出す時に、乗り越えなければならない壁が存在する。模索を続けながら前へと進めていく。その際、原因や因果関係を捜し突き詰めようともがくのである。

思い返してみると私自身、通院し、診断名がつく時まで、その知識があったであろうか。全くないとはではないにしても、とてもあるとまでは言えない。周りに、近い人に、社会に対して、知識の基準を自分に置き理解を求め、無理であろうと落胆をしたこともある。当時は、まず専門家である主治医に頼るしかなかった。

では、今現在はどうであろうか。確かに当時よりは知識も多少はつき、自分を苦しめているものも認識もし、受け入れ始めてもいる。しかし、ふと思うと自分に精いっぱい他人にまで気を回すことができているのではないのである。当然、知識は自分の疾患、障がいすら素人としてわずかに得ただけで、他の障害についてどれだけのことを知っているのだろうか。

「承認要求」や「理解してほしい」と思うならば、自身もまた他人を、他の障がいを理解しようとしなければ、訴えていく根底が揺らいでしまうと気づく。

今、私はこの学校で特別な支援を必要とする病気や障がいについての講義を受けている。このことを、私は幸いなこととして受け止めている。その中にはそれぞれの病気、障がいの存在すら知らなかったもの。存在だけで基礎すら知らなかったもの。更には、どのような支援が必要かなど自分の無知さにあらためて気づかされている。

このような議論になった時、他人が苦しんでいるのだから、自分の苦しみも耐えねばならない、打ち勝たなければならないとの思考に、向かう場合がある。このことはまず、比べられない種類の問題であり、その人に、自分に失礼に当たることである。もっと言うならば、「生命の尊厳」にかかわるものである。

そのことをふまえた上で、健康と言われる人を含め他人をどのように理解しようとし、そして、自分自身のことは、他人にどこまで理解を求めてよいのだろうか。

今時点での私の出した答えは、自分のまわりの関係を持てる範囲でよいのではないかということである。それでは、何も変わらないではないかと言われてしまうかもしれないが、他人は変えられないのであるし、自身にも限界がある。理解する、理解してもらうことを意識して働きかけはしても、それ以上は望むべきではない。

しかし、人、個人個人の理解の範囲はそれぞれでも、社会全体として考えた時には、包むようにすべての病気や障がいに対する理解がある社会が望ましいのではないだろうか。

個人個人と社会全体に、私が望むことは、病気や障がいに携わった時、本人を窓口となる機関までは導いてほしいということである。そのためには、最低限となる知識の教育と周知を広めていくべきである。自身が当事者本人になることも含まれる。

どちらも努力をして欲しいと望みたい。社会での個人の役割が、専門化、細分化している現代においては、むしろそのようにするしかないのではなかろうか。どこかで、接点を持つ



ことができれば未来へとつながる社会であって欲しい。まだ明確な答えはないので、引き続き考えていきたい。

最後のまとめとして、一度、社会との接点が薄れてしまった者が、再び社会に戻ろうとする時、どこから接点を持って生きていくべきか示したい。

私は、「ひきこもり」となり、自ら社会との関わりを薄れさせていた。私以外にも様々な理由により、社会との接点が薄らぐ、無くなっている人はいるのであろう。このような時、本人にその気持ちがなければ、無理強いになってしまい、こじれてしまうことさえあるのだと考えられる。

私の場合は、精神的に限界に達し、周りの人たちに促されたものの、自らの意思でメンタルクリニックへと足を運んだ。そして、診察を受けて診断を待つことになった。私は、いくなれば運が良かったのであろう。拒みつつも周りに人がいてくれたのだから。

それでも今なお、「ひきこもり」の前後のことに関しては、愛憎入り乱れた感情が、蒸し返しては解消される、の連続である。このような時、感謝の言葉で締めくくることが本筋であるかもしれないし、本心でもある。だが、ここは正直に書きたい。

「人の心は癒されない時もあるかもしれない。」

だからこそ、人としての弱い部分を知った自分は、そのことを大切にしたい。

(了)